

**大久保真也『日本の障害者雇用』**

障害者の自立と社会参加を考えるうえで、雇用の問題は非常に重要な位置を占めていると思います。政府も、障害者雇用促進法や障害者自立支援法をはじめとして各種の対策を講じていますが、企業や自治体が障害者の法定雇用率を達成しているか否か、という点に目が向いてしまい、数字が一人歩きする傾向があるように感じられます。たしかに雇用率は客観的な指標としてその重要性を否定するものではありませんが、障害者が自立して充実した社会生活を保障でき、障害者と健常者の相互理解が図れるような就労のあり方を、同時に考えていく必要があるのではないかと思います。障害者にきわめて少額の賃金しか支払われないということもよくあります。雇用する企業の側もバリアフリーに設備投資したり障害の性質を理解したりと、きめ細かな対応が求められます。障害者雇用は、量だけではなく質の問題を考えなくてはならないのです。

この論文は、法定雇用率といった数値のレベルにとどまらず、雇用の質のレベルに細かく立ち入って、障害者雇用のあり方を詳しく考察しています。

特に優れているのは第 3 章第 2 節で、障害者雇用に取り組む企業の事例を詳しく紹介している部分です。紹介されている 3 つの事例は、企業の規模や業種が異なり、障害者雇用のあり方にもそれぞれの特徴が前面に出ていて、バラエティに富んでいます。一つの領域やパターンに陥っていないことは、筆者である大久保さんのバランス感覚と、視野の広さによるものでしょう。「障害者と働くことを職場の文化とする方針の事例」「特例子会社制度を活用した事例」「社内に雇用奨励金を設け、金銭的な動機付けを図った事例」(16 ページ)として 3 つの事例を特徴づけたことは、論文の構成上とても良いと思います。

事例紹介の中で、各企業が障害者雇用にどのように取り組み、問題点を克服して、成果を挙げていったのかという過程がしっかり説明されているので、単に雇用率を達成したか否かという話にとどまらず、他の企業にとっても大いに参考になる、質の高い情報が盛り込まれています。特に筆者は企業の担当者に質問を送り、答えてもらっています(19 ページ)が、文献だけでは分からないことを質問することで、そこで得られた情報はオリジナリティがあるため、論文の価値が飛躍的に高まります。

この論文は全体的によく書けていますが、論文の内容それ自体よりも、筆者が障害者雇用問題に関心をいだいてくれたことにたいへん満足しています。「はじめに」によれば、筆者はもともと障害者雇用に関心がなかったが、授業で現場を訪問する機会があり、そこで障害者は「とても楽しく働いている」ことが分かったそうです。「そこで私は日本の障害者の雇用がどうなっているのかに関心を持った」。

授業が一つのきっかけになり、障害者雇用の問題に関心を持って調べ、卒業論文にまとめあげたということは、指導教員としてこれに勝る喜びはありません。